

「いさむ／いさめる」について見てきたが、その要点を整理しておく。まず、「いさむ」という働きの担い手は「心」であるが、それは単に個人に留まらず、多くの場合「せかいの心」として示されており、「いさめる」という働きの対象も「せかいの心」として示されている。次に、「いさむ／いさめる」の様態としては、「だんへ」と「にちへ」という語句で示されるように、一時的なものではなく漸次的なものであり、かつ日常性を伴うものであるといえる。それはまた「くる」や「でる」とも結びついて、到来・発現するものでもあるといえよう。そして、その成果としては、具体的には、農作物の実りや、「にほん」の治まり、「ところ」の繁盛などが現れてくると伝えられている。

そうした「いさむ」という働きの現れ方に関しては、まず、「せかいの心」が「いさむ」ためには、親神の存在や働きが人間に説かれて、かつそれが人間にもそれが分かることが肝要である。また、「上」の者や「下」の者がともに「いさむ」ためには、それぞれがともに根ざしている根元が何であるかを了解する必要がある。そして、さらにそれが「どのような者」であっても親神によってその胸の内が掃除されて、「たすけ一ちよ」に進められていくことによって「いさむ」ことができることとされている。このことは「いちれつのむねのうちさいすきやかに／そふちしたてた事であるなら」(十三号24)、「それからせかいぢううはぎがいさむ／よふきづくめにひとりなるぞや」(十三号25)と明示されている。

こうしたことは、逆の視点からいえば、「いさめる」主体が、第一に親神であるということの意味している。つまり、自動詞的に「いさむ」ための第一の要件は、親神が他動詞的に「いさめる」ことといえよう。それに対して、一号13などには、「いさめる」主体が人間の場合も示されているが、そこでは、具体的には農作物を「いさめる」(実り豊かにする)こととされ、その為に「つとめ」を勤めることが求められている。

親神は、「つとめ」の段取りを整えることに関連で人々の心を「いさめる」。したがって、「つとめ」や「たすけ」に向かうプロセスは、おのずと「心いさむ」ものとなる。親神自身が「いさむ」のは、「みなそろてはやくつとめをするならバ／そばがいさめバ」(一号11)という場合や、親神が人々の胸のうちを掃除して、「たすけ」を具体的なかたち、すなわち「りやく」(利益)として現わす場合などとされる。そうして「月日にもたしか心がいさむなら／にんけんなるもみなをなし事」(七号110)と説かれているように、次第に、親神も人間もともに「いさむ」ようになるのであろう。このことは、自動詞的な「心いさむ」生活の在りようが「心いさんてよふきづくめや」(三号54)と表現されつつ、親神による他動詞的な心を「いさめる」という働きの「よふきづくめ」を「をしへる」(教える)ことと並列的にも表現されていること(十号61)にも関連する。

さて、最後に、「いさむ」と「いさめる」がともに使われている箇所を取り上げて、両者の関係について「おふでさき」の具体的な文脈で考えたい。まずは、十号81から83。

にちへになんでもせかい一れつを

いさめるもよふばかりするぞや (十号81)

だんへとせかいの心いさむなら

りうけもろともみないさみでる (十号82)

この心どふしていさむ事ならば

月日にんそくつれてゑるぞや (十号83)

まず、81で「せかい一れつ」を「いさめる」段取りをするとして述べられ、82でそうして「せかいの心」が「いさむ」なら農作物(立毛)も共に「いさみでる」と続く。81の「いさめる」主体は親神であり、それを受けて82の「いさむ」主体は人間(「せかいの心」)、さらには農作物である。しかし、83で、「この心どふしていさむ事ならば」と問い直す。その答えとして、親神が「にんそく」を「つれてゑるぞや」と述べられる。「にんそく」とは「人足」で、『注』によれば「たすけ一条の上に親神様の手足となって、世界一列を救けてまわる者達」である。つまり、親神が、「せかい一れつ」を「いさめる」為に、その働きを手伝うような人々を「せかい」に連れて「でる」のであると説かれる。「いさむ」側の視点からいえば、みずから「いさむ」という働きの生じるためには、そうした「にんそく」たちと出会うことから始まるといえよう。そして、先述した十三号24・25を鑑みれば、そうした「にんそく」とのやり取りを通して、みずからの胸の掃除を進めるのだと考えられる。

次に、十一号53から57。

いまでと心しいかりいれかへて

よふきつくめの心なるよふ (十一号53)

この心どふしてなるとをもうかな

月日たいない入こんだなら (十一号54)

にちへにひとり心がいさむなり

よふきづくめの心なるよふ (十一号55)

月日よりにちへ心いさめかけ

よふきつくめにしてかゝるでな (十一号56)

このはなしなんとをもふてきいている

たすけ一ちよのもよふばかりを (十一号57)

ここでは、人間が心を「いれかへて」、「よふきつくめの心」になることがテーマとして挙げられて、54でそれがどのようにしてなるかと問い、続く歌でその答えを与えている。すなわち、親神が(おそらく、心がいさむとされる当人の)「たいない」に入り込んだなら、「にちへにひとり心がいさむなり」とされ、さらに「月日よりにちへ心いさめかけ」で、「よふきつくめにしてかゝる」と説かれている。ここでは明確に人間の心が「いさむ」のは、親神が「いさめる」からであると歌われている。「いさむ」側の視点からいえば、「にんそく」に出会い、親神が「たいない」に入り込んでその心を「いさめる」ことで、みずからの「いさむ」が起動するといえよう。しかも、その営みは、「にちへ」とされる。

「いさむ／いさめる」に関していえば、こうして「おふでさき」における用法を探求するとともに、「みかぐらうた」や「てをどり」(手振り)での使われ方も比較・検討していく必要がある。とりわけ、一号の冒頭と「よろづよ八首」は多くの点で類似しており、「いさむ／いさめる」も登場する。今後の課題としたい。